



『月曜日の憂鬱』と『初恋にさようなら』再び
考えるうまシカ番外編 第五十回

五十回を記念して、戸田環紀さん、激賞!!

「誰かに傷つけられたことがある人。誰かを傷つけたことがある人。それでも誰かを信じていたい人。そういう人に、読んでほしい。王子も魔物も極道も出てこない地味BLの決定版!

あなたの価値感に揺さぶりをかける戸田環紀のデビュー作。

「初恋にさようなら」幻冬舎コミックス リンクスロマンスより
好評発売中!! 切ない恋は、正義」

「是非、買ってください」弦楽器イルカ



弦楽器イルカ ⇄ 戸田環紀

戸田環紀さん

作品をいただけるとのことのお話、本当にありがとうございます。せっかくですので、ありがたく頂戴いたします。

ただ、他のファンの方に申し訳ないので、しかるべき時に、どこかに公開されてもよいのではないかと思います。ご判断はお任せしますが、新しい作品を待っているのは、きっと私だけではないと思いますよ。

感想はもちろんお送りしますし、もしよろしければ、戸田環紀さんがご自身の作品に自信が持てるように微力ながら尽くしたいと思います。

楽しみにしております。

なお、実は少し前から迷っていたのですが、次回からウマシカの帯を「広告欄」にしようと思っておりました。

誰にも依頼せず、誰の依頼も受けず、

「土砂災害さえ予防すれば、レジャーも避難も登り放題、一山いくらでお買い得！山」とか、

「川原がデパート！売るもよし、投げるもよし！石」とか、

「スカートめくりは性犯罪です！今めくるなら！本」とか、誰の役にも立たない広告を帯に出そうと思うのですが、それとはちょっと別で、50回目の節目に戸田環紀さんにオビラーになっていただきたいと思っておりました。

普通の帯文でもいいのですが、もしできれば、単に戸田環紀さんの本の宣伝だけを情熱を持ってもらえたら、私も「是非買ってください」と付け加えられますので、それがありがたいです。

最近の私は、創作の際はよくお団子の串をイメージします。

お団子という点はある。しかし、串という線がつながっていない。

串＝線を持ち上げて、お団子が思うようにつながって持ちあがらない。そういうイメージです。でも、いつかつながると思いますので、気長に待ちます。

それでは、また！



『月曜日の憂鬱』

月曜日は憂鬱だった。何故なら月曜日を見つめる彼女がいつも憂鬱だったからだ。

すべては月曜日のせいだった。上司が嫌味っぽいのも、生理が乱れるのも、犬が狂ったように吠えるのもすべては今日が月曜日だから。

「月曜日なんかなくなっちゃえばいいのに」

月曜日の前で、彼女は度々吐き捨てるようにそう零した。日曜日は置き手紙に似たもので、「日曜の夕方から彼女はよくそう言ってるぜ」と陽気に月曜日に教えてくれた。

日曜日は皆に愛されている。殆どすべての人が日曜日が来るのを心から待ち望んでいる。日曜日に働く彼女の夫でさえ「日曜は車もゆっくり走るし、閉まってる店も多いし、ほんの少し手を抜いても許されるような気がする」と言っているのを月曜日は聞いたことがある。

そしてそのあとに続いた言葉がこれ。

「それに比べて月曜日ときたら。どうしてあんなにイライラするんだ？」

自分はいらぬ存在なのだろうか。いなくなれば皆が幸せになるのだろうか。

月曜日には分からない。自らの意思でいなくなる方法も、いつから『月曜日』が存在しているのかさえ正確には知らないからだ。

ときに『今日』が羨ましくなる。

『今日』は午前十二時に生まれ、二十四時間後の午前十二時に死んでしまうので、人々に好かれようが嫌われようが、まったく気にすることがない。

少なくとも月曜日が知る『今日』はどれもこれも淡々としていて、よく寝そべっては大きなあくびをしていたものだ。

「うーん、『今日はとりあえずダイエットは休み』とか『今日は日が悪いから謝るのは明日にしよう』とか、色々と後回しにされることが多いとついつい怠けちゃうんだよねえ」

それに、ほら、どうせ自分あと三時間で死んじゃうし。

怠けものだ。投げ遣りだ。でも、それでも『今日』は人々から憎まれていない、と月曜日は思う。

実のところ、『今日』と同じように今週の月曜日と先週の月曜日は別のもので、先週の月曜日はもう戻らないし、今週の月曜日もうしばらくすればどこかに消えてなくなってしまうのだけれど、しかし大気を含む物質に沁み込んだ思念は何年となく代々の月曜日に受け継がれ、故に月曜日は、これまでの月曜日がどんな仕打ちを人々から受けてきたか、どれだけの暴言を吐かれてきたかを殆どすべて実感として知っている。

人々は誰も月曜日が痛みに堪えていることを知らない。

悲しんでいることを、塞ぎ込んでいることを、本当は今すぐにでも月曜日を辞めて逃げてしまいたいことを。

知っている者はどこにもいない。何故なら月曜日に感情があるなどとは誰も思っていないからだ。

人々はどれだけ月曜日を罵っても少しも良心を痛めない。何を言っても許されると思っている

。

いや、思ってすらいないのかも知れない。

何も考えていない。相手に心があるなどとは考えてもいない。

彼女の、彼の心の中にあるのは、自分の欲望ただそれだけ。

ふと月曜日は思う。

彼女が憂鬱だから自分は憂鬱なのだろうか。それとも、自分が憂鬱だから彼女も憂鬱なのだろうか。

そもそも、どうして人々はそんなに月曜日に憂鬱になるのだろうか？

月曜日に学校に行きたくない子供、月曜日に仕事に行きたくない大人。考えようによっては、人々が本当に嫌なのは学校や仕事だということができるのではないか。

月曜日は自分の思いつきに俄かに興奮する。

もしもこれが正しいのならば、本当に憎まれているのはこの自分、月曜日ではないということになる。

彼らは学校や仕事に直接怒りをぶつけることができず、だから代わりに月曜日に怒りをぶつける。月曜日は言い換えれば、彼らの怒りの受け皿になっているのだ。

月曜日は『学校』や『仕事』に訊いてみたくなった。

人々はあなたたちとともにあるときも憂鬱なのですか。あなたたちに怒りをぶつけることはあるのですか。あなたたちはそれで憂鬱になりますか。

それでもあなたたちもそこから逃げ出すことができないのですか。

私が月曜日を辞められないのと同じように。

考えは尽きなかった。いくら考えても答えは出なかった。

だが、午前十二時に生まれてからこれまで考えてきて、ひとつだけ分かったことがある。

自分か彼女が憂鬱であることをやめない限り、憂鬱はどこまでも続いていくということだ。

分かったところで月曜日は今生で憂鬱と手が切れる気がしない。

それに火曜日へとバトンタッチする時間は刻一刻と近づいている。

『今日』と同じように寝そべてしまえばいいと思う。

何も考えず、彼女の怒りを聞き流し、消えていくときを静かに待つのだ。

「ああ、やっと月曜日が終わる」

先ほどそう言ってから、彼女もベッドに向かったところだ。

もうここを閉じてしまおう。どうせ誰も月曜日のことなど心配しない。

電気が消える。彼女が毛布を被る。しかしすぐに電子音が鳴って彼女は暗闇の中でモバイルを手取る。

ブルーライトが照らした彼女の顔がみるみる陰しくなっていく、彼女は大きな溜息をついて心底嫌そうに吐き捨てる。

「だから月曜日は嫌いなのよ」

その途端、月曜日はペしゃんこになった。

嫌いだと言われるのは何よりも悲しい。苦しい。

もうすぐいなくなってしまうというのに、どうして最後の最後までこんな言葉を聞かなければいけないのか。

もっと早くこころを閉じてしまえばよかった。そうすればこんなに苦しむこともなかったのに。

「どうしてママはそんなに月曜日が嫌いなの？」

八歳になる彼女の娘の声が聞こえてくる。

彼女と娘は並んで寝ている。夫はまだ帰って来ない。

「それはね」

と疲れたような彼女の声が聞こえてくる。月曜日が嫌いな理由など聞きたくもないのに、暗闇の中は静まり返っていて、彼女の声は遮るものなく月曜日まで伝わってくる。

聞く覚悟などできていない。聞いたら自分はきっと粉々になってしまうだろう。

しかし、どんな暴言が並べ立てられるのかと思っていたのに、彼女は少しのあいだ黙ってから、不思議そうにこう言った。

「そうね。なんでなのかしら」

「昔はママ、そうじゃなかった。月曜日だって楽しそうに仕事してた。いったい何があったわけ？」

月曜日にいったい何があったわけ？

月曜日は半ば諦めて答えを待った。

だが、彼女の答えは相変わらず素っ気なかった。

「何もないわ。特別なことなんか起こってない。あの地震だって月曜日じゃなかったし」

「あの地震て？」

「ひどい地震があったのよ。あなたは覚えてないと思うけど」

「うん。知らない」

「そうね、あなたは知らない。それと同じように、どうしてこんなに月曜日が嫌になっちゃったのか、ママにも分からないのよ。あなたが言うように、本当に昔は月曜日だって楽しかった。ううん、働き始めたころは、月曜日が一番楽しかったのよ。休みが終わって、きちんと身支度を整えて、仕事へ向かう自分が一人前になれたような気がしてね。ああ、自分はもうただの主婦じゃないんだ、社会の一員になれたんだって、そう思ってたのに」

月曜日は自らの悲しみを忘れて彼女たちの話に聞き入った。本人にすら分からない何かが彼女の身の上に起こったのだ。

人々が月曜日の思考に気づかないのと同じように、月曜日もまた、人々のすべてを知っているわけではない。

「ママはたぶん、忙しすぎるんだと思う」

と、娘が言った。

「私もそう思う」

と、彼女はすぐに答えたが、次に娘が言ったことに対しては、しばらく返事をしなかった。

「それからずっと、えらくなりすぎたんだと思う」

偉い、という言葉の意味は分かるが、その感覚が月曜日には分からない。

曜日には順列があるだけで、そこに上下関係はないからだ。

偉くなりすぎると何が問題なのか分からないが、どうやら彼女にとって娘の言葉は凶星だったらしい。

「うん、そうね。たぶん偉くなりすぎた」

そう答えた彼女の声は、少し湿り気を帯びていた。

「がむしゃらにやってきたもの。偉くなりたかったのかも知れない。でもいつの間にか立っている位置が自分のキャパシティを超えてた気がする。無理なんか充分してる。やればやるだけ力が出るなんて嘘。どんどん自分が削られて、このまま過労で死んじゃうかもって思うと、すごく怖くなる」

「ママ、大丈夫。落ち着いて。私がいる。ずっといる」

「ええ、そうね。あなたがいる。それだけでいい。ねえ、どうしてママはあなたのママというだけで満足できなかったのかしら。あなたがいればよかったのに。それだけでよかったのに」

彼女はとうとう火がついたように泣き出した。めそめそ、でも、しくしく、でもなく、おなかをすかせた赤子のように腹の底から声を振り絞って号泣した。

見えないが月曜日には分かる。彼女は娘を力一杯抱き締めている。

「生きているだけでよかったのに」

娘はもう何も答えない。

彼女の夫が帰って来た。

泣いている彼女の背をさすり、自分のほうへ引き寄せながら優しく彼女の手から娘を取り上げる。

「もう寝よう。人形ももうお休みの時間だ」

「人形って言わないで」

「おれには人形にしか見えないな」

「あなたには分からない」

夫は彼女をなだめながら、娘をサイドテーブルに置く。

彼女が娘と呼ぶものを、夫は人形と呼ぶ。

月曜日には彼女と娘の話し声が聞こえるが、夫はもう何年も娘の声を聞いていない。

月曜日はふたたび憂鬱になったが、しかし、今は自分が嫌われていることが憂鬱なのではなく、これまでにしてこなかったこと、そして、自分に残されている時間とを思って憂鬱になった。

彼女とともに憂鬱になるのではなく、もっと他にできることがあったのではないか。嫌われていることを歎くのではなく、彼女の憂鬱の理由に思いを馳せていたなら、自分はもう少し建設的な月曜日になれていたかも知れない。

彼女の憂鬱をなくせるような何かが自分にできていたとは思わない。月曜日には差し伸べられる手がなく、労りの言葉を伝える口がないからだ。

だが、月曜日だけでも憂鬱をなくすことができたなら、この世界からひとつは憂鬱がなくなったということになる。

憂鬱は世界を荒廃させる。伝染し、蔓延し、人々の心と体を蝕んでいく。また、それにより怠惰に、或いは自棄になった人々の手によって、大気や大地、海原が汚染されていく。

「そうだな、おれには分からない。君は月曜日に来るたびにそうやって泣くけど、なんのために一週間があると思ってる？」

夫の声が聞こえてきて、月曜日は考えを中断して夫の言葉をこころの中で反芻した。

なんのために一週間があるのか。

「初七日、四十九日、歯に刻まれる週輪線。人は七日ごとに脱皮して新しい体を作っている。どうしてなのかは分からなくとも」

「しゅうりんせん？」

「木の年輪みたいなものが動物の歯にはあって、日々の日輪線は七日で一組の週輪線を作るんだ。何故七日なのかは分からない。でも、おれたちが決める余地も選ぶ余地もなく、七日のリズムはおれたちの体の奥深くに刻み込まれている」

歯のない月曜日には七日のリズムを刻む人々の肉体を身を持って知ることができない。それでも、七日のリズムのひとつである月曜日は、そのときほど自身と人々とは強く繋がっていると感じたことはなかった。

月曜日も一週間も今日も明日も、それはすなわち時間のひとつだ。

時間と人々との関わり方の根底にあるのは、憂鬱や喜びといった感情の一面ではなく、おそらくは肉体の盛衰、すなわち、生きている営みそのものだ。

生きているあいだは時間から逃れることはできない。或いは、死んでからでさえ。

「だから、月曜日に死んだものは月曜日に生まれ変わる。おれはそう信じている」

夫は静かに、しかし力強くそう言ったが、彼女は何も答えなかった。月曜日は何を聞いてももうあまり自分のところが揺らがないことに気がついた。

時間が終わりに近づいているのだ。

「だけど」

夫の声が遠くに聞こえる。月曜日は雑念を消し、注意深く夫の声を拾い上げた。

「だけど、君があの子の手を握り続けていたら、あの子は生まれ変わりに行けない」

それから彼女の嗚咽が聞こえた。それが月曜日が聞いた最後の声だった。けれど、不思議ともう憂鬱にはならず、月曜日は静かな気持ちで自分が時間の枠組みから離れてゆくのを待っていた。

月曜日に死んだものは月曜日に生まれ変わる。

ならば自分はきっとこれから生まれ変わりに行くのだろう。

次もまた月曜日に生まれ変わるのだろうか。

分からない。

けれどなんとなく、次も彼女のもとで月曜日に生まれ変われたらいいなと思った。

そして、もしも生まれ変われたらこう伝えるのだ。

月曜日も捨てたものじゃないと。昨日までの君はもうおらず、新たに生まれ変わったのだと。だから悲しみは癒えるのだと。あの子の手を離してもいいのだと。

あの子の手を離したとしても、君があの子を愛していないということにはならない。

どうやって伝えればいいのか、月曜日にはまだ分からない。もしも今と同じように月曜日に生まれ変わったら、やはり自分には伝える手も口もないからだ。

でも、できそうな気がするのだ。いや、きっとできるに違いない。

何故なら我々『時間』は彼女たちの目に見えるところだけでなく、見えない体の奥深くにこそ強く息づいているのだから。

はらからのメッセージは彼女に必ず伝わるだろう。体の内側から真剣に湧き起こる震えは、外側からの震えに負けない強さがあるはずだ。

いつか伝えられるように生まれ変わりたい。

いつの日か、きっと必ずできるだろう。

何故だか素直にそう思えるのだ。

どうしてなのかは分からなくとも。

そこで月曜日はこときれた。

月曜日の思考もどこかに消えてなくなった。

月曜日にこころがあると知らない人々は、月曜日がいなくなったことで憂鬱にも、もちろん幸せにもならなかった。



戸田環紀さん

お忙しいところ、ご返信と小説、ありがとうございます。

ちょっと長文になるかもしれませんが、せっかくなので、編集者目線で書かせていただきますね。

『月曜日の憂鬱』

後半に波を打って押し寄せるような切実さが、戸田環紀さんらしいと感じました。グッとくるものがありました。

「戸田環紀ならこうでなくっちゃ」と読者に思わせる展開がさすがだと思います。

素晴らしい作品をいただきまして非常に光栄です。ありがとうございます。

メールを書くにあたり2回読みましたが、一番最初に思い出したのが、『水曜日のスーパーマーケットに行ってはいけない』でした。

それで確認して読み直したのですが、『水曜日、朝七時。』もあるな、と。

もしかして戸田環紀さん、曜日フェチですか？

そこで『エアメール』に気付きました。全く見落としていました。

なんというか、忘れっぽい勝手なファンの感想で恐縮ですが、あの二人がふらっと帰ってきたみたいで、これはこういう思い出し方でも、本当の手紙みたいでよかったです。

こっからちょっと『月曜日の憂鬱』を公開されるに向けてのお話になるのですが、戸田環紀さんの文章を読んでいると、ふと霧を感じる時があります。これはいったいどこの何を書かれているのか見失ってしまうような、何とも言えない、これは戸田環紀さんの作品でたまに感じる独特の感じですよ。

『水曜日のスーパーマーケットに行ってはいけない』でも一部分、感じました。

もしかしたら翻訳的、ということなのかもしれませんし、抽象的、ということなのかもしれません。

でも、『初恋にさようなら』では感じませんでした。たぶん、編集の手が入ったから、商業作品だからだと思います。

この霧の中に様々な可能性が浮かんでは消えるような展開も面白いと思います。

あるいは逆に、商業作品として霧のない作品を書かれる方が向いているのかもしれません。

もしかしたら、ここは意識して書き分けられた方がいいかもしれません。

『月曜日の憂鬱』の冒頭を何度か読み返し、ああ、そうか、と理解しました。

月曜日に人格があるのか、彼女が月曜日に憂鬱なのか、あるいは、月曜日に人格があるように彼女が感じているのか、など、いくつかの物語のラインがあると思うのですが、そこがなかなか通りませんでした。

冒頭の3行くらいを変える手もあるのかもしれませんが、たとえば、
「自分はいらない存在なのだろうか。いなくなれば皆が幸せになるのだろうか。
月曜日は一人、憂鬱だった。」

こう順番などを少し入れ替えるだけでも、読者の霧はある程度晴れるのではと思います。

でも霧が晴れる感覚は先を見通せる喜びもありますが、読み方の可能性が狭められる残念さもありますので、あえて読者にもっと霧の中を歩かせる方法もあるかと思います。霧を晴らすだけが文学ではないですね。

あと、「今日」のところがコメディタッチで面白いと思うのですが、「まったく気にすることがない」は少し言いすぎな気がしました。

「刹那を生きる今日に振り返る過去はない。ただ全力で走り去る覚悟だけ」という生き方は、やはりのんきなだけではない、裏の顔がある気がします。

一般の人々が、月曜日に心があるのを知らないように、彼女の話を通して、今まで気付かなかった「今日の裏の顔」に月曜日が気付く、という展開でもいいのかもしれませんが。月曜日が今日に特別な感情を抱くとか。

そうすると、月曜日にまつわるコメディも含めた部分と、切実なテーマもはらむ彼女の部分を、よりちょっとだけ、うまくつなげるかもしれません。

でも、やはり完全に霧でもいい気がします。

彼女と月曜日が、混然一体となる話でもいい気がします。

たとえば最近、松本大洋『花男』という漫画を久々に読み返した際、この幻想と現実が半々の世界には既視感があると思い出したのが、『この世界の片隅に』でした。『花男』のように架空の世界の物語であれば幻想もすんなり入るのですが、『この世界〜』のように史実を基にした物語だと幻想にちょっと違和感が生まれます。

ですがどちらも味わい深く、改めてなるほどと思いました。

あと、地震の部分は、どこかにつながっているのか、気になりました。

もしかしたら、そこはより彼女の身に近い事象を使われた方がいいかもしれません。

以上のような点で少し、ブラッシュアップされると、最後の部分がより強く、ぐっとくるように感じました。いかがでしょうか。

今思いつきましたが、第五十回は番外編として、思い切ってこういうメールのやり取りをそのままあげるのも手かもしれませんね。

「小説がいかにして書き上がるのか」

実は前々から思っていたのですが、たまにコントやマンガや絵などの創作過程を動画で見聞きする機会はあるのですが、小説家がどうやって文章を書き上げるのか、リアルタイムで推敲が見える映像作品があったら面白いと思うのです。

作家が原稿用紙やモニタを見つめるその裏側から、読者が作家の目線を追えたら、新しい発見がある気がします。なんなら、演劇や落語に近い形で、客が作家とモニターをじっと見つめるだけの新しいタイプの公演があっても、面白いと思います。

同じ文章を何回も書き直すタイプの作家もいれば、一回も直さない作家もいると思いますし。

というと、以前ご提案したカンガルーの回が今回でもいい気がしました。いかがでしょうか？

あとアレの件ですが、草原克芳さんの『建築家の檻』とか、片桐奈菜さんの『退室』とか、『ハウス』もそうですが、一時期、私のお気に入りが続々ピックアップに掲載されたので、月500円払う価値はあったかな、とそのときは一人勝手にしめしめと思い上がりました。もちろん皆さんの作品が良かったからですが、自分の選球眼にニヤるウマシカでした。

とりあえずまた。



弦楽器イルカさん

おお、編集者目線という新しい切り口の感想、非常に興味深く読みました。
ありがとうございました。

差し上げておいてなんですが、あれは数日前に出来上がったものを熟成なしでお渡ししてしまったので、まだまだ足りない部分がたくさんあると私自身感じます。

でも、小説にとって最も大事だと思う「はらからの言葉（の芽のようなもの）」は、入っていて、そういう感覚は久しぶりだったので、書き上げたときにぞくぞくというかわくわくするような達成感を覚えました。

ちなみに曜日フェチではなく、自分としてはまったく意識することなく今回の作品を書きました。

が、流石に書いたあとに「曜日タイトル」が多いことに気づいたのですが、それが何故なのかは私にも分からず……。

これも体の奥底の七日リズムの成せるうんたらかんたら……。そんなわけない。

霧の中、と良心的に書いていただきましたが、たぶん、分かり辛いんだらうなあと思いました。

自分の中にもやもやとあるものをうまく言語化できていない。

小説を書く技術力の問題と思います。

余談ですが、先日過去の小説を読み返したのですが、あまりの文章のお粗末さに驚きました。ショックを受けたとかがっかりした、とかではなく、それはもう単純に驚いた。

と、私の技術力の問題はさておき、私がより抽象的なものいいを好む、という部分は確かにあるかもしれません。

「謎」を残すことによって深みが出る小説と、「謎」を残すと「伏線が回収されていない」と批判される小説やジャンルがあると思うので、このあたりは仰るとおり意識的に書き分けていかないとな、と思います。

地震の部分ですが、確かにこの部分は「伏線」が回収されていませんね。

いらないのかもしれない。

くどいようですが、はらわたを千切って投げ込んだようなものなので、しっかり洗わないとな、と思いました。

以下、ウマシカ50回目のカンガルーについてですが、小説をアップするのもメールをアップするのももちろんOKです。

そうすると、私が書き直した小説があったほうがいいでしょうか？

私はかなり書き直すほうなので、第二稿が「完成形」になるかは分かりませんが、それでよい、ということであれば書き直してみます。

他にも何かできることがないかな、と思いつつ。



戸田環紀さん

商業的に書かれている戸田環紀さんに、お金にもならない件で、出過ぎたメールを送ったと反省しておりました。ご返信いただきありがとうございます。もうちょっと考えてから書くようにします。

もしもう一度書いていただけるのであれば、非常にありがたいですし、より楽しみです。締切はありませんので、出来次第、はみだしとして掲載できたらとてもうれしいです。いつの回に載るのか、私も一ファンとして楽しみです。

引っ張りに引っ張って約5年後の第百回でもいいかもしれませんね。

読みやすい文章だけが良いとは絶対に思いませんし、単に読みづらいというのも違うと思います。

わかりやすければいいというのであれば、「もし月曜日に人格があったら」と冒頭で書けば良いワケですが、それでは文学的情緒に欠けます。つまらない。

いろんな含みがある世界観を目指されたように思うので、もしかしたら、この作品世界の広がりに対して少し迷いがあるのかもしれませんがね。

「もし私が月曜日ならどう感じるだろう」といったラインもありますし、「月曜日が想像する彼女の話」というラインもあると思います。

月曜日と彼女なら、彼女の話の方がより重要と感じましたので、彼女に重点を置いてもいいのかもしれませんね。

でも、「月曜日という伏線がまったく回収されない」ラインも面白い気がします。

こういったメールのやり取りを掲載してよろしいのであれば、大変光栄です。

もちろん、帯は帯でお願いします。

第五十回はカンガルー回ということで、実は弦楽器イルカの正体が戸田環紀で、友人が月曜日だったというオチはどうでしょう。

今回はこんな感じです。どうかな？



弦楽器イルカさん

えええええっ。

いや、全然失礼ではありません。

ていうかどの部分でそう思われたのだろう。

うーんうーん。

そもそも私がまないたの上に小説のつけて「どうぞ好きにしておくんなさい」と半ば送りつけたのが始まりなので、失礼どころか、こうして色々なご意見やアイデアをいただけて、私としては本当に嬉しい限りです。Y O。

私は確かにプロ作家であり続けたいともがいている者ですが、えーと、たとえばプロの料理家だって、お友達のうちに「クッキー焼いたの～♪」って持っていくと思うんです。

私はただ弦楽器イルカさんが喜んでクッキーを食べてくれたらそれでいい。

それで、「ちょっと砂糖足りなくね？」とか「ナツメグいれんな」とか、そういう話ができたら楽しい。

原稿ですが、ではいずれ書き直してみます。

寝かせておく時間があるほうがいいので、いつになるとお約束できないのですが、頃合が来たら「そろそろだな」というのが分かるはずです。

そろそろが五年後かもしれないけど（笑）

ちなみに、メールの掲載はもちろんOKですが、第一稿も載せますか？

もちろんご判断は弦楽器イルカさんにお任せしますが、小説があったほうが読んでいる方に分かり易いのではと思いました。

ご参考まで。

帯の件了解しました。

なにぶん帯文は書いたことがないので、少し早めに送りたいと思っておりますがいつまでに送ればいいでしょうか？

書き上げた直後は色々と思うところの多かった小説ですが、今となってみれば愛しい二人となりました。

このような機会をいただきまして、改めてありがとうございます。

すみません、ひとつだけ、オチが「弦楽器イルカが戸田環紀で」は分かるんですが、友人さんが月曜日だったというのがどうひねってもわからなかった。です。

それではまた！



結論から先に書くけど、『美しい顔』騒動のベストな結末は、震災関連の本がもう一度話題になって売り上げが伸びるとともに、引用と盗用の線引きや、災害報道の在り方について国民的な議論が起こることだろう。

それに俺はウマシカだから、これを機に震災を語りたい人々はそれぞれの体験をもっと語るべきだと思う。

母国からの避難勧告で海外退避した外国人も、電車が止まったり高層マンションでいつまでも揺れが止まらなかった人も、トモダチ作戦で被爆した米兵も、甲状腺を手術した子供も、命を懸けてる原発作業員も、程度の差こそあれそれぞれに被災体験がある。そこには本来、もっとたくさんの言葉があるはずだ。

だがこの国では時として沈黙が美德とされ、絆という名の同調圧力がある。

国民の多数が、困っている少数を支援するのが絆なら、その分、多数の国民生活を守るために、少数が抱える不都合な意見を押し殺すのも絆だろう？

だからこの国では、無理のない程度に使える絆を使い分けながら、自分の身は自分で守るしかない。

そこで今回俺が考えたのは、アンパンマンの話だ。

アンパンマンにすごく似てるけど、明らかにいびつな顔をしたアンパンマンっぽいパンマンが、森の仲間たちと遊んでいる。右目が膨らんでたり、ほっぺが焦げすぎてたり、顔も凸凹の楕円だったり。

いつものカバおくんたちも「アンパンマン僕も背中に乗っけてよ」とか楽しそうだけど、内心は「違うよな」って薄々感づいてる目だ。

おかしいだろ具合が、またどうせ菌の人の変装だろ、このくだりが終わったら毎回バレるって例のアレだろ。まあ仕方ない、この世界はそういう風にできている。しょせん俺らは、アンと食とカレーの三パンマンによるトリプルパンチが最強である世界の住人だ、流れに身を任せ目の前の享楽に耽るのみ。って声にならないツッコミが聞こえそうだ。

ところがそこへ、菌の二人がUFOで飛来して、っぽいパンマンを倒しに来たからさあ大変。でもどうせ勝つんでしょ？

ところが、っぽいパンマンはコテンパンにやられてしまい、森の仲間たちに激震が走る。どうしたんだアンパンマン！

そこへ今度は本物のアンパンマンが飛んでくる。いつものパンチを菌の人にお見舞いだ！

バイバイキ〜ン！

はいはい。あれ、それじゃキミはいったい何パンマンだい？

ごめんね森の仲間たち、実は僕アンパンマンじゃないんだ。アンパンマンに憧れてる、ただのアンパンマンパンマンなんだ。

アンパンマンパンマン？

そう、キミの町のパン屋さんにも売られてるだろ、アレだよ。

アレなの？

うん。原発作業員が6月6日に突然死しただろ、甲状腺を手術した子も200人を超えた。この国ではあまり報道されない大事な人々の生き様を忘れないでいようっていう命の星の気持ちから、僕は生まれたんだ。

偽パンマンってことだね。どうりで、なんか片目だけ膨らんでるし、ほっぺが焦げすぎだし、顔もいびつに凸凹だし、だいたい匂いがいつもと違って甘ったるいんだよな。

そうだよ、僕の中にはチョコが入ってるからね。この頭にある穴からチョコを注入してるのさ。

だよな。だいたい町のパン屋のアンパンマンパンってアンじゃなくて必ずチョコ入りだよな。

著作権を侵害しすぎないように、万が一「チョコパンマンパンです」って言い逃れるための方便の可能性があるよ。でも原作に最大限の敬意は払ってるつもりさ。原作もパンもどっちも売れてほしいと思ってのパクリだよ。

これからも町のパン屋さんにはアンパンマンパンが並び続けることで、原作が未永く子供たちに親しまれる、それもまた平和な風景って言えるんじゃないかな。

にしてもキミの顔はちょっといびつすぎだけどね。顔は美しすぎればいいってもんじゃないけどさ。チョコが頭からちょこっとはみ出てるし。チョコだけに。

わっはっは。牧歌的な笑い。

おわり。



考えるウマシカ番外編～第五十回 『月曜日の憂鬱』と『初恋にさようなら』
再び～

<http://p.booklog.jp/book/122702>

著者：弦楽器イルカ＋戸田環紀

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gengakkiiruka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/122702>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト